身体技法としての弓道とその伝達について

はじめに

今日、剣道や柔道、弓道といった武道は国際的にも発展し、日本を代表する文化となっている。武道の歴史は武術として実践的に用いられてきた武士の時代までさかのぼることができ、現代に至るまでに様々な過程を経てきた。その中でも弓道は、特に長い歴史を歩んできた。弓道で使われる弓矢は狩猟の時代から使われてきた道具である。その狩猟道具であった弓矢が武器として発展することでその歴史を作ることとなる。その長い歴史の中で、弓道は指導者から修練者へと受け継がれ、今日に至る。

生田久美子は『「わざ」から知る』の中で、武道や日本の伝統芸能の伝達においてその身体技法の習得がどのように行われているかについて述べ、学習者が師匠と修練を重ねることで、どのように習得し、その結果どのような「型」の習得に至るのかに注目している。弓道でも同じように、指導者と学習者という関係性の中で身体技法の習得が行われる。しかし、弓道は、全日本弓道連盟という組織の中で伝達が行われており、その習得の過程にも、組織の影響というものが現れている本論では、生田の議論を踏まえつつ、組織という点に注目し、弓道における身体技法の伝達と、その習得について考えていきたい。

まず、第 1 章では弓道の歴史と現在の弓道を統制している全日本弓道連盟について述べていきたい。弓道は戦争の歴史に左右されてきた。そこから弓道を大衆化し、平和や精神性をより求め、組織化していった過程と、そこから生まれた全日本弓道連盟の現在の役割について考えていく。

第２章では、組織化された弓道について考えていく。一つの身体技法として捉えることができる弓道は、その裾野も広く、全国に、また、中学生から高齢者まで幅広い世代の人たちにより実践されている。その中の多くの人たちは、全日本弓道連盟に所属しており、統一された身体技法に基づいて修練している。そこで、ここでは全日本弓道連盟の組織、統一はどのようになされているのかについて調べていく。

そして、第３章では、生田の『「わざ」から知る』の「わざ」の習得について述べながら、組織化れている弓道における身体技法の習得について考えていきたい。生田の「形」の模倣から始まり、様々な認知プロセスを経ながら「型」の習得に至る過程を、全日本弓道連盟により統制されている弓道ではどのように行われているのか比較し

ていく。また、そのなかで、組織というものがどのように影響しているのかを考えていく。

第 1 章　弓道の歴史と全日本弓道連盟について

弓道は、弓と矢を使って的に当てる行為を高度に洗練させたものであるが、弓矢の使用自体は狩猟採集の時代に遡る。もともとは狩猟の場で使われてきた弓矢であったが、全日本弓道連盟が出版している『弓道教本』に 13 ページにわたり、日本弓の歴史が書かれていることからも、日本では弓矢に、同じように狩猟に弓矢を使っていた他の大陸とは異なる歴史・意味をもたせていたことがわかる。日本弓は、洋弓と異なり非常に長い形状をしている。これは、古来日本人が弓を「信仰の対象として「天表」と仰ぎ、神秘的なものとなり、また、霊器として（全日本弓道連盟　1981:26）」取り扱ってきたことに由来する。弓に対して「尊崇感」を持っていたことによって長大な形になったのだ。そのため、弓矢は、儀礼や祭礼の場で神聖な道具として扱われるものだったのだ（松尾　2016:12）。

10 世紀ころには、弓馬を操るなど武術を専門とする武士が誕生する(魚住　2013:10)。そして戦乱の世となったときには、弓は武器として重要視された。鎌倉時代には、武士のたしなみとして、流鏑馬・傘懸・犬追者などといった騎射も生まれた(魚住　2013:10)。武器として使われるようになっても、持ち運びなどの利便性に特化した形にならず、その形を保持していたのは、戦国の世であっても弓に対する「尊崇感」を持っていたからであろう（全日本弓道連盟　1981:26）。そして、室町時代から江戸時代にかけては、多くの流派が生まれることとなる（松尾　2016:12）。

14 世紀には、小笠原家が弓馬や礼式を伝承した伝書を作ったことで、流派の先駆けとなる(魚住　2013:10)。また、１５世紀後期には、日置弾正正次の日置流なども誕生し、「礼は小笠原、射は日置（竹林）」と呼ばれるほどに発達する（吉田　2005:17, 稲垣　1997:115）。その中で、射術の向上を目的として、弓具や射法の研究も行われるようになり、弓術が体系化していったと言われている（松尾　2016:12）。これらは、現在科学的に見ても極めて洗練されている（松尾　2016:12）と言われていることからも、現在の弓道につながる射法などは、この時代がからあったものであると言えるだろう。江戸時代になると、弓・馬は上級武士のたしなみとされるほどであり、武士の中で修練されていた(魚住　2013:12)。江戸時代の流派は、異名同流を含めると５１の流派があったとされている(魚住　2013:12)。現在も行われている三十三間堂の通し矢も、この頃成立した日置流竹林派が尾張徳川家と紀伊徳川家に定着し、競争しあった三十三間堂の通し矢に由来する(魚住　2013:13-14)。力のある藩

の武士たちが、藩の名誉をかけて競い合った習わしが今に続いているのだ。また、外国が開国を迫るようになった 18 世紀には、武術が重視され、諸藩で藩校が作られ、武術の稽古が推奨されるようになった。藩校では、現在の弓道場と同じように 28 メートル（15 間）先にある 36 センチ（1 尺 2 寸）の的を狙う弓道場で修練されるようになった。この江戸時代後期から、現在につながる武道の始まりが見られるといえる(魚住　2013:14-16)。

しかし、明治になり近代化する中で、武士の時代が終わり、弓術は急速に衰退していく。弓は本来の精神性を失い、楊弓店や大弓場で栄えたギャンブル性が高い娯楽となった(黒須 1993)。その中で伝統的な弓術は、弓術を専門とし、真摯に取り組んでいた人たちによってなんとか保たれているに過ぎなかった（松尾　2016:12）。そんな中、日清戦争・日露戦争が勃発する。この戦争により再び武術への注目が集まるようになり、弓術の活気も上がっていった。明治 28 年（1895）には、桓武天皇によって大日本武徳会が設立され、弓術や剣術や柔術、薙刀などの演武会が開かれるようになった(魚住　2013:19)。学生の間でも弓術は盛んに行われるようになる。日露戦争により軍国主義的傾向が強まる中で、大学や高等学校などの学生を中心に盛り上がりをみせた(魚住　2013:21)。明治 44 年（1911）に、柔道・撃剣を中学校での正科に加えられることとなる(魚住　2013:22)。

そのことで、それぞれ形の統一などがなされ『剣道』という集団指導法をまとめた物が出版されたり、柔道という名称が広がるようになった。加えて、生花や茶の湯が近代化のために華道や茶道と名乗り始めた。こういった流れの中で、大正 8 年、武術専門学校の校長の西久保弘道が柔術。撃剣・弓術を柔道・剣道・弓道へと改め、大正 15 年に文部省の用語として弓術は弓道に代えられたのだ(魚住　2013:22-23)。日本の弓術は、技術を主体として的中を目標とする外国の弓射（弓術や弓技とも言えるだろう）とは異なり（全日本弓道連盟 1981:38）心的要素が必要となる点から考えても、弓道という名称はそれに即したものに思われる。

明治末期から大学間では弓道大会が開かれており、大正 13 年には、スポーツの全国大会である明治神宮大会にも採用されるようになった(魚住　2013:24)。昭和 4 年（1929）には高等学校の教材に弓道が取り入れられ、昭和 11 年（1936）には中学校でも正課採用となった。第 2 次世界大戦中には、体練科武道として必修になり、実践に直結するような教育体制へと変わっていく。しかし、昭和 20 年の終戦を機に、GHQ により武術が制限されることとなり、武徳会は解散させられ、武道の授業も禁止となり、再び弓道存続の危機が訪れる（魚住 2013:28）。このままの性格だと弓道は衰退してしまうため、弓道にスポーツ的要素を取り入れることになった(魚住　2013:28-29)。

そこで設立されたのが日本弓道連盟（昭和 24 年）である。その後、公益財団法人全日本弓道連盟となり弓道を統括するために組織化されたのだ。昭和 26 年には教育の場において

も弓道が解禁された。「日本的なものとして、かなり独善的に理解せられた傾向があった（全日本弓道連盟　1981:35）」弓道が民主化したといえる。昭和 9 年に、大日本武徳会が射法・謝礼を統一した「弓道要則」をまとめているが世論の反対にあった。そのため、弓道連盟は、さらに研究を重ねた上で、昭和 28 年に、現代弓道の射法や体配の指標を示した『弓道教本』を作成した(全日本弓道連盟　1981:129-130)。ここには、各流派の長所を取り入れた、統一された弓道の大綱・規範が記載されている。流派もそれぞれその形を残したまま存続しており、新台以前の流派武術は古武道と呼ばれている。全日本弓道連盟には 2016 年現在、約１４万人が登録しており（松尾　2016:14）、その中の多くの人はどの流派にも属していない。全日本弓道連盟には、各都道府県の４７団体が加盟している（全日本弓道連盟「概要」）。北海道には北海道弓道連盟がある。他に、国際弓道連盟（International KYudo Federation）があり、２４の国が加盟している（国際弓道連盟　「IKMF Member Nations」）。また、日本の団体と提携していない国際団体 IKYF も２３カ国ある。

この組織の理念は、「この法人は、日本固有の伝統文化である弓道の継承及び欺道の普及振興に関する事業を行い、国民体力の向上とスポーツ精神の涵養に資し、もって社会文化の進展に寄与することを目的としている（全日本弓道連盟　「概要」）」である。そのため、指導者の育成や競技力の向上事業や、称号の査定及び段級の審査などの事業を行っている。

また、全日本弓道連盟とは別の組織として昭和２８年には全日本学生弓道連盟が創立されている（昭和５年には日本学生弓道連盟が設立されている）（全日本学生弓道連盟　「沿革」）。大学の弓道連盟である。先述の歴史の中でも、学生の弓道というのは時代に流されながらも行われてきており、独立しているのは、その流れを汲んでいるからかと思われる。９つの地区連盟で組織されていて、各大学はここに所属することになっている。北海道の場合北海道学生弓道連盟。連盟会長などは全日本弓道連盟に加盟している先生方が行っているが、運営などは学生が行っている（全日本学生弓道連盟　「連盟役員」）。

このように全日本弓道連盟は、弓道の統一に向けた様々な取り組みを行っている。次の章では組織化された弓道について考えていきたい。

第２章　組織化された弓道

狩猟に使われていた弓矢が武術となり受け継がれてきた中で、弓道は様々な歴史をたどってきた。そして現在は、全日本弓道連盟のもと組織化され、約 14 万人が加盟している。弓道は年を取っても続けられるため、加盟者は中学生・高校生といった学生から、100 歳近い方まで幅広い年齢層に渡る。また、47 都道府県全てに加盟団体があり、中学や高校の加

盟組織もあることを考えると、とても裾野が広く、規模の大きい組織だということがわかる。

この連盟では、昭和 28 年に制作された『弓道教本』に則って統一が図られている。教本は全部で 4 巻あり、第 1 巻射法編・第 2 巻射技編・第 3 巻続射技編・第 4 巻理念と射技詳細に分けられている。第 1 巻は、弓道の基本となる「射法八節」の解説や、基本体と呼ばれる射を行う上で必要な立ち方や座り方などの説明や、射技、礼節の精神や動作の方法を示した体配なども書かれている。そのため、弓道をしている人にとっては基本となる内容で、多くの人に読まれている。この第 1 巻は、時代の変化に伴い、現在では「教本に記述された内容をさらに充実させ(全日本弓道連盟　1981:16)」るために改訂増補されたものが出版されている。しかし、これらの教本は、連盟に加盟している者が購入を強制させられているというものではない。それでは弓道連盟は他に、弓道を組織化し運営していくにあたりどのようなことがなされているのか。

まずは、称号や段級の昇格を行う審査について述べていきたい。審査には、段級を審査するものと、称号を審査するものがある。まず、段級は、五級から始まる級位と初段から十段まである段位を取得していく。そして称号は、範士・教士・練士の 3 階程を受けていくこととなる。一般的には、五段→練士→六段→教士→七段→八段→範士→九段→十段というように取るという。級から六段までの審査は、入場から行射、退場までを審査する実技試験と筆記試験で審査される。

この筆記試験では、それぞれの段に対して、事前に公表される射法・射技・体配・基本体等の A 群（4-7 題）と、理念・概念・修練姿勢等の B 群（4-7 題）の中から、当日ランダムでそれぞれ 1 題ずつ出題される。中でも A 群は、弓道教本に書かれていることを参考に解答を考えるようにできているため、審査を受ける人たちには、弓道教本は必要なものとなる。これら A,B の問題は、最近まで公表されている場所とされていない場所があり、審査に臨む上で受審者たちに差ができてしまっていた。そのため、平成 27 年度から審査会の公正・公平性を担保するために、全会場で公表されることとなった。また、練士・教士・七段・八段では、1 次審査、2 次審査があり、ほかに練士・教士は面接も行われる。範士、九段、十段は推薦によって選ばれる。これらの資格基準は以下のように統一されている。

五級　弓道修練の初歩的階層にある者

四級　秩序のある指導を受けており、弓矢の扱い方に進歩があると認められる者

三級　射の基本動作及び弓矢の扱い方が整い秩序にある指導の下に修練を経たと認められる者

二級　修練の過程が三級に比例して進歩していると認められる者

一級　射の体型（射型）及び体配が概ね適正であると認められる者
初段　射型・体配及び射の運行共に型にかない、矢所の乱れぬ程度に達した者
弐段　射型・体配共に整い、射術の運用に気力充実し、矢所の乱れぬ者
参段　射型定まり、体配落着き、気息整い、射術の運用が法に従い、矢飛び直く的中やや確実な者
四段　前項の要素に加え、離れ鋭く、的中確実の域に達した者
五段　射型・射術・体配共に法に適って射品現われ、精励の功特に認められた者
六段　技術優秀にして精錬の功更に顕著な者
七段　射型・射術・体配自ら備わり、射品高く練達の域に達した者
八段　技能円熟、射品高雅、射芸の妙を体得した者
九段　弓道の真体に達した者
十段

範士　（1）徳操高潔、技能円熟、識見高邁にしてとくに斯界の範たること
（2）教士の称号を受有すること
教士　（1）人格、技能、見識、共に備わり、弓道指導に必要な学識、教養及び実力を有し、且つ功績顕著な者
（2）練士の称号を受有すること
練士　（1）志操堅実にして弓道指導の実力を有し、且つ精錬の功績顕著なること
（2）五段以上の段位を受有すること
（全日本弓道連盟　審査規定による）

四段までは、各都道府県の地区ごとで地方審査が行われ、五段は連合会による連合審査が行われる。北海道の場合、中央地区、中部地区、南部地区、北部地区、西部地区、東部地区でそれぞれ地方審査が行われ、それらをまとめる北海道弓道連盟連合会のなかの 3 区から選出された 5 人により連合審査が行われる。審査委員資格は、審査規定第 14 条により、「全弓連が行う審査委員資格認定制度により資格審査に合格した者に会長が与える。」と記されている。それ以上の段、称号は全日本弓道連盟から派遣された範士の先生によって審査される中央審査で審査される。

これらの審査が公それぞれの場所で公平に行われるよう審査委員にも統率が取られている。本論文では、実際に審査を行っている S 先生に話を聞いた。S 先生は教士で七段をもっている先生である。まず先生は、審査をするにあたり配られた紙を見せてくれた。「審査統一基準」という紙で、上記に記した教本に載っている審査の資格基準よりも詳しい基準が記

されていた。体配や射法八節、射技のそれぞれのポイントごとに、何が望ましいか、プラス評価やマイナス評価などが書いている。この基準も参考にしながら審査委員に臨むという。また、審査委員をするにあたりどのような心構えでいるかということについて述べた論文の下書きも読ませてくれた。

「審査は…重要な事業である。審査は、弓を志す人にとっては目標の一つであり、普段の稽古を見てもらう場でもある。審査員は審査規定をよく熟知し、射の技術面、精神面、修業の経歴、修養の程度をよく観察し、審査基準に基づき、公平に私情を交えることなく、正しい信念と責任を持って審査を行わなければならない。…審査にあたって受審者は真摯に礼を尽くし、一手を全身全霊で引くわけですから、審査員も段級の高低に関わらず、袴を正し、真剣に審査に当たることが、受審者に対する礼儀であり、責任と思います。受審者全員の採点を最初から最後まで一定にさせるためには、体調を万全に整え望まなければなりません。…」

この文章からわかるように、審査をするにあたり、それがどういう意味を持つのか、どのような基準で、どのような態度で臨むべきなのかということがしっかりと審査委員に意識されているということがわかる。

審査に関して、筆者は 10 月 15 日に苫小牧で行われた地方審査・連合審査を見学させてもらった。審査は、午前 9 時から午後 3 時まで、審査を初めて受ける無指定の部から五段の部まで 108 名の受審者で行われた。この間審査委員は、5 人 1 組で行われる審査を次々と審査していった。結果はその日のうちに出される。筆記試験の 65 点以上という合格ラインと、実技試験の、審査委員 5 人のうち、3 人以上の合格判定をもらえたものが合格ということになる。これほどの人数を、1 日で、審査委員の交代もなく行われるのだ。確かにここには審査委員の心構えが必要になってくると思われる。いかに公平に審査するかということが求められるのだ。

全日本弓道連盟では、弓道の全国大会も執り行っている。明治神宮奉納全国弓道大会や、天皇杯、皇后杯の全日本弓道選手権大会、全日本弓道大会や今年から都道府県対抗弓道大会なども開かれている。弓道の大会は、的中数を競うものが多いが、全日本弓道選手権のように、的中だけではなく、射全体の採点によって順位を決めるものもある。このような大きな大会は、弓道を志すものにとっての目標となり、弓道の活性化に繋がっているといえる。また、各地区や中学、高校、大学から選抜された者が出場できる大会もあり、地区ごとの団結や盛り上がりを図るための重要な大会であったり、それぞれが目指すべき大会が行われて

いることがわかる。歴史ある大会や名誉ある大会を開くことで、弓道の普及や弓道競技力の向上が図られている。

また、弓道連盟では、講習会や練習会といった、個人の技術や知識を向上させるような取り組みも行われている。これは、全日本弓道連盟が開催を義務付けているものではないが、各地区の弓道連盟（札幌では札幌弓道連盟）の指導部が開催を決定している。弓矢を持った基本の姿勢となる執弓の姿勢や、入場から行射、退場までの礼などを含めた一連の流れの所作について学ぶ場となっている。それぞれのレベルにあった講習会が開かれているが、内容はほぼ変わらない。現在札幌では、三段までが対象の初級講習会や四段から錬士六段までが対象の中級講習会、それ以上の人が参加する南地区指導者講習会などが行われており、それぞれ、年に２回ほど開催されている。また、本州では、中央研修なども開かれており、北海道からは１人参加できるようになっている。弓道の歴史は、北海道よりも本州の方が長いため、本州の講習会に出て、新しい指導や歴史などを伝達講習することも各地区の講習会では大切なこととなってくる。

これらの講習会は、講習会に参加している者が指導者となり教えることになる。そのため、指導を受ける側にとっては、講習会に参加経験のある指導者が望ましい。また、講習会に出ないと、新しい情報や変化についていけないこともあるため、弓道をしている者にとって講習会に参加することも重要な修練の一つになってくるだろう。

また、講習会は自主的に行われるものもあるそうで、一時期札幌では、東京の範士の方を招いて女子部講習会が開かれたこともあったそうだ。特に北海道は、先述した通り弓道の歴史が浅い。また、歴史を受け継ぎながらも、時代に沿って変更される箇所もある。そのため、講習会などだけに頼らずに自主的に本州へ勉強に行き姿勢も大切だという。

これらの講習会で伝わったものは、普段の練習にも、影響を及ぼし、射法の統一に関わってくる。例えば、曲がり方についての所作について、今までの指導方法では、理想とされる動きにならずうまく伝わらないため、その指導方法は禁止になり、新しい伝え方に統一されたのだ。ある時に講習会で、片足ずつ４５度ずつ角度を変えて曲がると指導されたため、練習会や普段の練習の時にもそのように指導されるようになったが、最近になって、90 度を曲線を描くように曲がると講習会で指導があったため、そのように指導するよう変えられたのだ。

一方で、高校・大学によっては正しい、そのように変更された所作が正しく伝わっていないこともある。講習会に参加する人が指導するよりも、それまで教わってきたことをそのまま後輩に伝える直属の先輩に指導されることが多い大学などは、変更点や変わった所作などの情報が入ってこない。そのため、大学や高校によっては古い指導がそのまま受け継が

れている可能性があるのだ。そういう点では、弓道連盟とつながりの少ない環境にある人たちには、統一の影響力が及んでいないことがあるともいえる。

また、全日本弓道連盟では、各地区の連盟の中で、練習会や弓道教室というものも行われている。弓道初心者にたいして、年齢関係なく弓道に取り組めるものだ。これも、札幌弓道連盟や中央地区といった単位で、指導部により開催が決められている。札幌では、中央体育館で練習会が行われている。弓道を始める門戸にもなっており、型を学ぶゴム弓や素引き、巻藁練習といった練習のステップをしっかり踏みながら練習していけるようになっている。この練習会では、初心者の他にも五段くらいまでの人が参加しており、複数の指導者とともに練習するようになっている。北海道立総合体育センターの弓道場でも、弓道教室が開かれている。練習会とは異なり 10 回の練習で的に向かって弓を引けるようにする完結型のもので謝礼形式をとっている。このように、形式は異なるものの、弓道を始めるきっかけとなったり、練習会という形で弓道を練習する環境も整えられていることがわかる。

このように、全日本弓道連盟が、弓道を組織化し、統一、普及していくにあたり、様々な取り組みが行われていることがわかった。これらは、全日本弓道連盟だけの力ではなり得ず、各地区との連携も重要であり、それぞれが機能していくことで組織化された弓道が成り立っているといえる。また、弓道に参加するということは、ただ練習し受け身でいるのではなく、連盟が取り組んでいる審査や大会、講習会といったものに、積極的に参加することも求められているのではないだろうか。次章では、知識化された弓道の射場や所作についての伝達や指導について述べていきたい。

第 3 章　知識化された身体技法の伝達について

全日本弓道連盟は、その設立まで様々あった流派をもとに、統一された射法を作成し、ひとつの組織として成立している。今日も続いている流派もあるが、本論文では、全日本弓道連盟という組織という点に焦点を置きながら、本章では、まず生田久美子の『「わざ」から知る』において、身体技法がどのように伝達、習得されているのかについて述べていきたい。

まず、生田は、「わざ」について、「身体技法あるいはそれを個人の能力として立体化した身体技能としての「技」に狭く限定しているわけではなく、そうした「技」を基本として成り立っているまとまりのある身体活動において目指すべき「対象」全体（生田　1987:8）」であるとしている。また、著書の中では、この「わざ」について日本古来の伝統芸能・武道を想定している（生田　1987:8）。そして、「技」にあたるものとして「形」、「わざ」の完成形として「型」を用いている。それぞれ、「形」は外面に表された可視化的な形態であり技術・技能とし、「型」を「形」の完璧な模倣を超えたものと説明している（生田　1987:23）。

「わざ」の特徴としては、次の３点を挙げている。

ひとつ目に、西欧の芸術（ピアノとか）や学校教育で行われているような段階的学習法が取られていない、非段階制が取られているという点である。華道や茶道などにも、免状という目標になり得る段階はあるものの、厳密な意味での段階的学習法とは言えない。段階的な目標ではなく、同じ稽古内容だとしても、上級者や初心者などそれぞれ学習者自身が目標を生成しているということである（生田　1987:13-17）。

そして二つ目に、良い、悪いというような大きな評価は行われるものの、その理由や詳細な評価などが行われないという、評価の非透明性があるという点だ。なぜそのような評価になったのかを学習者自身が考えることで探求が持続させられるのだ（生田　1987:17-18）。

三つ目に、「わざ」の習得には、まずその身体技法固有の「形」の模倣が行われるという点が挙げられる。師匠の動きを模倣し、それを繰り返すことで最終的に、「型」の習得が行われるというのだ（生田　1987:20）。

この３点が「わざ」の伝達の過程で行われているということである。この中でも生田は特に三つ目に注目し、「形」が「型」になるにはどのような過程があるのかを解明していく。これまで、「型」とは、「精神を知ること」などといった「感性的なレベルでの表現による説明が圧倒的に多かった」（生田　1987:24）が、それを記述的な言語で表現した。生田は、「型」をフランスの社会学者マルセル・モース（Marcel Mauss）の「ハビトス」という概念を用いた（生田　1987:25）。「ハビトス」とは、身体技法を「無意識な動作の連続としての「習慣」とは異なる、学習者の社会的かつ理性的な働きを前提とした（生田　1987:26）」ものとして捉えたものである。この「ハビトス」は、信頼したり、権威のある人による動作を「善いもの」であると同意した上で模倣することで、無意識に近い動作になっていく。この「威光模倣」が「わざ」の身体技法においてもいえるのである。師匠の動作に対して「善さ」を、学習者自ら納得して模倣することで「型」へ移行していくのだ（生田　1987:26-30）。

「型」に移行する、ハビトス化する際には、マイケル・ポランニー（Michael Polanyi）の「暗黙知」が働いているのだという（生田　1987:30）。身体技法がハビトス化するときに「はじめは全く意味を持たなかった感覚が解釈の努力によって、意味のある感覚へと変化していく（生田　1987:31）」という過程があるということだ。「形」を模倣しているときに、「解釈の努力」をすることで、「形」が主体的な動作になり、「形」の意味を理解し、新たな目標を生成することができるようになる。これが、「型」の生成につながるのだ（生田　1987:32-36）。

「形」が主体的な動きとなる「型」を習得した状態について、生田は「間」の体得が必要になってくると述べている（生田　1987:51）。「間」の体得とはとは、「「わざ」に固有の「呼吸のリズム」（生田　1987:51）」の体得できた状態であり、「「形」の意味をその活動

の中で身体全体で模索しながら、解釈していき、やがて自らの主体的な動きにした状態（生田　1987:50）」なのである。「呼吸のリズム」とは「拍」を数えられるものではなく、数量化不可能なもの（生田　1987:56）で、その会得が「型」の習得なのである。

また、「間」、「型」の体得には学習者に 3 人の自分が備わることで起こるとも述べている。身体技法を模倣し、主観的な認知活動をする自分、模倣している自分を、師匠という客観的視点から吟味する自分（この段階で身体技法に関して自分の考えを持つようになる）、そして、その 2 つの視点を交互に移動させることで生じる、身体技法の世界全体を捉えることのできる自分である。三つ目の自分が、世界全体の意味の把握や、世界全体から見た時の、自分がしている身体技法の「善さ」を認識することを可能にさせるのだ（生田　1987:58-62）。

「わざ」の世界は、学ぶ場と日常生活を切り離す西欧の芸術のプロセスとは異なり、日常生活と密に結びついているという（生田　1987:72）。師匠の生活を垣間見ることから「間」、呼吸のリズムを感じとることができるのだ。例えとして、その究極の形として内弟子制度を上げている。師匠と生活を共にすることで、身体技法における「間」を学び共有することができるということだ（生田　1987:74）。

そして、生田は、身体技法を伝達する際に用いられる「わざ」言語に関しても言及している。「わざ」言語とは、特殊な、記述言語、科学言語とは異なる比喩的表現をもちいたものである（生田　1987:93）。記述できる言葉（3 秒間その振りのままで、もっと時間をかけて、ではなくためて、ためてなど）は使わずに、比喩的表現で伝えることで、学習者がその動作をイメージを頼りに喚起できるようにしている（生田　1987:99）。比喩で示された感覚を自ら考えて体現することができた、ということが、「形」をハビトス化したといえるのである（生田　1987:101）。「型」の体得のために「わざ」言語は非常に重要な役割を果たしているといえる。

以上が、『「わざ」から知る』の身体技法の伝達・習得に関する部分である。これが、組織化された弓道においてはどのように働いているのだろうか。

生田の述べているプロセスに即しながら考えていきたい。まず、弓道においての「形」とは『弓道教本』に示されている射法八節が当てはまるだろう。様々な流派の射法を総合させながら作ったものである。加えて、『弓道教本』に記載があるその他の体配に関しても「形」といっていいだろう。

そして、目指すべき「型」は、『弓道教本』の弓道の最高目標にもあるように、「真・善・美」を備えた射をすることである。「真」とは、弓の冴え・弦音・的中などによって偽りのない、ごまかしのない射を求め、真実を追求することである(全日本弓道連盟　1981:42)。また、「善」とは、弓道の倫理性をさす。「進退周還必ず礼にあたる」や「射は礼にはじまり

礼に終る」という言葉からもわかるように、争いや憎みといった感情に流されず礼や「不浄」、「平常心」といったものを求めることである（生田　1987:43）。「美」とは、「真なるもの」の美しさや「善なるもの」の美しさ、「弓の壮厳性と人間の進退周還、それに静かな心的態度がリズミカルに動くこと（生田　1987:44）」の美しさである（生田　1987:43-44）。これらの習得を目指し弓道を修錬している。

それでは、まず「わざ」の三つの特徴から考えてみる。

一つ目の特徴、非段階制をみてみると、確かに弓道はこれができたらこれをするというような段階制はみられない。弓道には、射法八節を覚えるゴム弓の練習、矢をつけずに弓を引く素引きの練習、巻藁に向かって近い距離から矢を放つ巻藁の練習、そして実際に２８メートル先の的に向かうといった練習の流れはある。しかし次のステップに行くための明確な基準はなく、指導者の感覚に任されるのだ。しかし、昇段の審査という面から見ると、生田が述べていた免状とは違った性格が見えてくる。免状は、道具に応じてあたえられる段階であったりするために、段階制とはみなさないということだった。

一方で、全日本弓道連盟により行われている審査は初段からどんなに高段になっても行われる内容は五段から肌脱ぎの動作が加わる以外ではほとんど変化がない。入場から退場に至るまでの一連の流れの中で、それぞれの段に応じた射かどうかが判断される。弓道連盟により制定された審査規定に記載されている資格基準（第２章参照）が、「形」だけではなく「型」の部分にも言及されているところから考えると、「型」の習得に向けた段階になっているといえるのではないか。

二つ目の特徴である評価の非透明性は、弓道にも共通していえることだろう。「形」である射法八節や、基本的な体配を覚える際の手順の間違いなどは指摘されるし、射に関しては体の働きなどについて言及されることもある。しかし、「型」の習得に際する過程においては学習者の探求に任されているといえる。

そして、三つ目の模倣という特徴は、組織化された弓道ではあまり行われていないのではないか。もちろん、模倣という過程が全く無視されているという話ではない。しかし、第２章で述べたように、弓道では弓道連盟として講習会や練習会が行われており、積極的指導伝達が行われているといえる。生田の著書にあった、学習者が入門し、まず行われるのは師匠の動きをただ模倣するという過程は踏まれていないのだ。

弓道を始めたらまず、上記したように、射法八節の動きを覚えるゴム弓の練習が始まり素引き、巻藁へと進んで行く。大学や、練習会でも的前で練習するようになるまでの過程に大きな違いはないとＳ先生も話していた。それぞれの練習の始まりには、指導者・先生がその動きに対し説明する。その指導を受けた上で、次のステップに進むと言われるまで、何度も繰り返し動作を繰り返すのである。この繰り返しの中で、ポランニーの暗黙知による解釈の

努力が行われているといえるであろう。今自分が繰り返しているそれぞれの動作にはどのような意味があるのかということを噛み砕き理解していくことで、次のステップにつながる到達点まで進んで行く。的前に入ったら修練というのは的に向かって引くということが大半であるが、同じ練習にしてもそれぞれが目標を持ち修練するのだ。

次に、「型」を習得するのに重要となる「間」について考えていく。「間」は弓道においても重要なものといえる。弓道の「間」とは、審査では高段者の基準で求められている「射品」と大きく関係しているだろう。審査委員経験のあるS先生は、射の中身が低段者と高段者では、引く内容の点において違って見える。射技だけではなく『弓道教本』に記されている「基本体」としての「基本の動作」や「基本の姿勢」が教本の則って楷書で行われているのが見て取れるという。例えば、歩き方で言えば、つま先が上がらず踵をなるべくあげず引きずらないように歩いている歩きが、自然と行われているように見えるということであったり、弓を引き分ける動作に重みがみえる、というようなことである。

この「間」とも関係してくる3人の自分の視点も弓道にもいえることである。先述の動作が自然と行われるようになったということは、射品が伴いつつあるということである。これは、弓道という世界を「三人目の自分」の視点からみて、「善さ」を認識した結果であるということである。それに加えて、「わざ」の世界が日常生活と関連してきている、といえるであろう。射即人生というように、弓道の「間」が日常生活と関連し、それが「間」となって弓道に還元された結果、現れる射品なのではないか。これが「型」となり「真・善・美」の伴った射へとつながるのだ。

最後に、伝達に際して重要になる「わざ」言語に関して考えていく。弓道に関していうと、射法や体配については『弓道教本』にすべて言語化されて記載されている。これは、組織化されている弓道ならではの特徴であるといえよう。身体の動きや、理想な形がどのようなものかな関しても、時には数値なども用いて説明されている。

弓道において、一番の基本になるのは『弓道教本』に書かれていることである。それぞれの動作に関しては、立ち方の「上体を正しく保ち、吸う息にて腰を伸ばしつつ一方の足のつま先を立て、次に他の足も爪立て、息を吐き、吸う息にて足を踏み出し（踏み出した足の踵はつけない）、爪先を軸として胴造りをくずさないように立ちつつ他方の足をそろえ、（項を伸ばし）息を吐く。（全日本弓道連盟　1981:70-71）」のように、詳しく示されている箇所が多くある。このようにきちんと言葉で知識化されているのだ。

しかし、先述したように『弓道教本』の購入は義務ではない。また、同書は出版されたのが昭和28年であり、改訂は何度かなされているものの、その言い回しは実際に行動に移す際難しいものがふくまれる。例えば、弓矢を両手に持ったときの、「執弓の姿勢」について、「両肩を平らにし、肘を張らず、両手は相対し円相となり、体を正しくして腰を据え、心気

を整え、伏さず、反らさず、固からず、緩からず、従容たる自然体で、体と弓矢が一体となることが望ましい。（全日本弓道連盟　1981:89）」という記述がある。言葉自体も難しいものもあるが、実際どのような体勢で、目指すものがどのような体勢なのかわかりづらい箇所もある。

また、弓を引き分けた後の「会」という動作では「精神・身体・弓矢が渾然の一体となり、満を持し気迫をたたえ、間断なく天地左右に伸張して（伸合い）発車の機を熟させる頂点で、まさに弓射の極致である。（全日本弓道連盟　1981:115）」というように、初心者にはわからない感覚についての記述も多くある。

ここで大事になってくるのが、指導者による伝達である。弓道は、弓矢という道具や 28 メートル必要な弓道場が必要になるという特殊な環境にあるため、一人で独学ではじめることはほぼないと言えるだろう。また、高校や大学の部活動からはじめることもあるため、必ず指導者がつくことになる。

そこで、伝達、指導について先述の S 先生に話を伺った。S 先生も大学生に 20 年以上指導しているという経験がある。S 先生によると指導者には、教本に書かれている難しい言葉や解釈を、例えなどを使いながらわかりやすく伝えるという務めがあると話す。例えという観点を考えると「わざ」言語も用いられてはいる。しかし、上記にある「執弓の姿勢」を指導するときは、円相などの難しい言葉は使わずに、正しく立った姿勢で、弓と矢を持ったときに、それぞれの延長戦が二等辺三角形のように交わるように持って、弓の先は床上 10 センチに保って、それしか言わないと話す。これは、比喩などではなく、分かりやすさに重点を置いた伝達になっている。

また、「会」についての記述については、こんなのは難しすぎる、私でもそんな体全体を使っている状態になるときは稀で、初心者に指導するときのそんなことは言わない、という。はじめは、ちゃんと弓が適切な引尺まで引けるように、それを見ているのだ。つまり、「わざ」言語の比喩的表現を使い学習者に解釈してもらうというよりは、射の繰り返しの修練の過程における解釈の努力であったり、「間」を習得していく中で教本にあるような状態も体得するようにしていくのではないだろうか。

もちろん、比喩的表現がないわけではない。「丹田を使って…」という箇所があったら、重いものを持ち上げるようにお腹を使って、と伝えたり工夫しているという。これも分かりやすさを考えての伝達である。この例えや伝え方は、自分が高校で始めてから今まで教わってきた言葉を、思い出しながら、付け加えながら、その人に伝わるように指導しているのだという。丹田の例えも自分が教わった経験によるものである。確かに、実際に指導しているところを見ていると、難しい言葉は使われていない。イメージしやすいような擬音を使ったり、〇〇のようにといった例えを使った伝達が多く見られた。また、その人の体に触れなが

ら力を入れる箇所を教えたり、ただ動作を見せるのではなくその動きの軌道をその人の手を取りながら一緒にたどってみたりといった指導がされていた。教わる人によっては、骨格により、教本通りの身体の使い方ではうまくいかないこともある。そういう場合も、指導者の経験によって、その人に適した身体の使い方を教えることもあるという。

このように、弓道では「わざ」言語に加えて、分かりやすさを重視した伝え方をしており、それが受け継がれてきたこともわかる。また、講習会などが開かれていることからもわかるように、それらは統一、共有されやすい環境にあることもわかる。『弓道教本』に言語化された記述があるからこそ、そこを目標にすることができる。そのため「わざ」言語を用いるよりも、数値化されていたり感覚的なことも分かりやすく伝えられているのだ。

以上から、弓道にも、生田の「わざ」伝達の過程が見られる箇所もあったが、全日本弓道連盟により組織化されているために独自の伝達過程が取られている点があるということがわかった。

おわりに

３章に渡り、弓道、全日本弓道連盟について、そして、弓道においての伝達について述べてきた。弓道は、狩猟の道具だった弓矢が、武家また各流派の誕生によりひとつの身体技法を用いられた武道へと変化していった。そして現在は、全日本弓道連盟により組織化され、その組織の中で伝達が行われているのだ。

『「わざ」から見る』にある伝達と比較してみることで、弓道には、組織化されているが故に、日本の伝統芸能や武道とは異なる身体技法の伝達が行われているということが明らかになった。まず、弓道の身体技法は全日本弓道連盟によって制作された『弓道教本』により名言化され、統一されていることがわかる。

また、組織そのものが、審査や大会、講習会などといった取り組みを積極的に行っている点や「型」の習得に至るまでをしっかりと審査規定のなかで昇段という基準を設けている点や、模倣という方法はとらず、積極的指導を用いている点などがあげられる。そのことを考えると、約 14 万人という加盟人数を抱えるなかで、きちんとした統一を図り、また、門戸の広い環境で弓道が存続、浸透するように、組織としての機能が果たされていることがわかる。

伝達という点から考えても、生田の「わざ」言語とは異なる方法がとられていた。個人と指導者という世界で「型」の習得を目指すのではなく、講習会などを開催しながら、「型」、「真・善・美」の習得へ向けた、弓道という世界の共有が図られている。また、『弓道教本』

を基にした、わかりやすさや個人に合った指導に重点をおいて万人に向けたものになっている点からも、組織のちからが働いていることがわかる。

　このように、組織としてある弓道は、今後も国際化や時代の流れに即して方向性を変えながらも、各個人の「型」の習得を目指した身体技法の修練が伝達されていくのだろう。

参考文献・引用文献

生田久美子（1987）『「わざ」から知る』（認知科学選書 11）東京大学出版会.

公益財団法人全日本弓道連盟（1981）『弓道教本第一巻（改訂増補版）射法編』全日本弓道連盟.

松尾牧則（2016）『はじめての弓道』誠文堂新光社.

魚住孝至（2013）「第 1 章　武道の歴史とその精神　概説」国際武道大学付属武道・スポーツ科学研究所『武道の歴史とその精神（増補版）』（武道論集Ⅰ）国際武道大学付属武道・スポーツ科学研究所　pp.8-38.

吉田レイ（2005）『武道としての弓道技術教本 弓の道-正流法入門-』BAB ジャパン出版局.

稲垣源四郎（1997）『やさしく教える弓道教本』東京書店.

黒須憲（1993）「弓術から弓道への名辞の変化について-改称理由と意義について-」,『武道学研究』26 巻（1993-1994) Supplement 号,p24,日本武道学会.

全日本弓道連盟「概要」,< http://www.kyudo.jp/aboutus/overview.html>　2017 年 12 月 4 日アクセス.

International Kyudo Federation 国際弓道連盟「IKYF Menber Nations」, <http://www.ikyf.org/ikyf_members.html>2017 年 12 月 4 日アクセス.

全日本学生弓道連盟「沿革」,< http://www.pac-mice.jp/zennichi/enkaku.html >2017 年 12 月 4 日アクセス.

全日本学生弓道連盟「連盟役員」,< http://www.pac-mice.jp/zennichi/yakuin.html >2017 年 12 月 4 日アクセス.

全日本弓道連盟「審査規定および内規」,< http://www.kyudo.jp/pdf/documents/probation_rules.pdf >2017 年 12 月 4 日アクセス.

ファイル名：　　　　【完成】身体技法としての弓道とその伝達について.docx
フォルダー：　　　　/Users/osamunote/Library/Containers/com.microsoft.Word/Data/Documents
テンプレート：　　　Normal.dotm
表題：
副題：
作成者：　　　　　　ymorita@mmci.jp
キーワード：
説明：
作成日時：　　　　　2021/04/29 8:58:00
変更回数：　　　　　2
最終保存日時：　　　2021/04/29 8:58:00
最終保存者：　　　　Microsoft Office User
編集時間：　　　　　2 分
最終印刷日時：　　　2021/04/29 8:58:00
最終印刷時のカウント
　ページ数：　　　　16
　単語数：　　　　　17,597
　文字数：　　　　　1,308 (約)